

---

# 世継ぎ問題（仮）

佐々木 沙女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世継ぎ問題（仮）

### 【Nコード】

N6663Z

### 【作者名】

佐々木 沙女

### 【あらすじ】

優秀で民に慕われている女王陛下が治める帝国、しかし、世継ぎが居ない問題が勃発。彼女が中々踏み出せない問題だったが…。

## その1 (前書き)

いつまでも続けられるか、わかりませんが。

## その1

「陛下。いい加減にして下さい。」

もう、この事は国をあげての一大事なのですから。」

「分かっている。」

「お分かりなら、何故私の意見を聞いて頂けないのでしょうか!?!」

宰相様お可哀想に…、と誰しもが同情の眼差しでみていた。

「いつも言っているではないですか、世継ぎがないのですから、養子なりとるとか…、なんなら今からでも産みますか?」

「それもいいかもな」

「はっ、そうですか。じゃあ、さっさと相手見つけて産んでください。」

いつもの様に宰相様が、はぐらかされて終わりだ。しかし、今日は違った。

「ジル。」

その問題だが、解決しようと思う。

四公を呼んでくれ。」

あまりの驚きに、宰相ことジルバート・スチュワートは思考が止まった。

「えっ!?!本当ですか!?!」

「ああ。」

間髪入れずの返事に、今度はその話を聞いていた者達が驚きの声をあげた。

## その2

『四公』とは、大貴族である。

大貴族とは、北のアルバース公爵、南のクラウス公爵、東のグルーヴィー公爵、西のステリア公爵 を総称して『四公』と呼ばれる。

数日後。

王の執務室に、四公が集まっていた。

北のハルビル・アルバースは代々武将の家柄で、体格のよい大男。黒髪の短髪で顔には傷がある。

「ジルがとうとう陛下が腹を決められたと言っていたが、本当か？」

南のブラウン・クラウスは、知識人の為学問に多くの力を注いでいる。少し長めの胡桃色の髪で、眼鏡を掛けている。

「ええ。私にも実に嬉しそうに話しておいででしたが。」

東のアマリリス・グルーヴィーは、四公の中で唯一の女性である。

本来ならば、男性継承である公爵家を継ぐ事を特例で認められている。栗色の長い髪で、可愛い顔をしているが中身は…。

「ジルの被害妄想でなくて？」

「いつも、あの御方はジルで遊ばれているじゃない。」

西のジーク・ステリアは、最も領民からも慕われている。ある意味顔で…。茶髪で派手な顔立ちをしている。若い頃はさぞかし遊んでいたと言っ噂。

「さあ、それは我らが陛下に会って見ないと真実は分からないよね。」

ト

執務室の扉がノックされた承の返事もなく開いた。

### その3

この部屋の主であり、ライヴィイ国の主でもある国王 ティアナ・ラグナロス が金髪の長い髪を靡かせながら、宰相ジルを伴って入って来た。

「わざわざ遠い所を、すまないな。」

「いいえ、陛下のお召しとあらば私はどんなに遠い地に居りましても、すぐに飛んで参りますわ。」

「アマリリスの陛下鼻肩がまた、始まったな。」

陛下に引っ付いて離れないアマリリスを皆が呆れた様子で見っていた。陛下は宰相に目配せし、何とかアマリリスを落ち着かせて、椅子に座らせた。

ティアナは疲れた顔で、紅茶を一口飲んだ。

「今日集まって貰ったのは、ジルから聞いていると思つが…」

「では、お決めになられたのですか。」

興味津々な顔で、クラウス公が尋ねた。

「どうしたらよいと思つ？」

「はっ？」

「……。」

部屋の中に静寂が訪れた。



## その4

部屋の中に静寂が訪れた。

一番早く正気に戻った宰相ことジルは、沸き上がる怒気を抑えることが出来ず叫んだ。

「陛下あ！！」

あなたって人は、毎回毎回私で遊んで良いと思ってんですかー！！」

「楽しいではないか」

「。。。」

四公達は、また陛下の宰相弄りが始まったと、微笑みを浮かべその場が和んだ。

本人は、ジルの怒りを気にもせず優雅に紅茶を啜っていた。

一頻り陛下の愚痴を言ったことで、宰相ことジルは落ち着きを取り戻した。

同郷の誼みじみでハルバース公が最後まで、聞いてあげることが最早お約束である。

「さて、恒例のジル弄りも終わったことだし、陛下そろそろ本題に入って頂けないでしょうか？」

「ジーク、お前は私に話かけるないつも言っているだろうが！！」

ステリア公ことジークが、陛下に話しかけた事によって部屋の温度が一、二度下がったのは気のせいではない…。

## その5

ステリア公と陛下は仲が悪い。

昔はそれほどではなかったのだが、いつの間にか二人は犬猿の仲になっていた。原因は不明だ。

「まあまあ、落ち着いて下さい。

あなた方がケンカを始めてしまったら、終わらないでしょう。」  
言葉は優しいが表情が怖い。

「ごめんなさい。」

ブラウン・クラウド公は普段は優しいが怒らせると、恐ろしい目にあつと経験上分かっているので直ぐ様二人は謝罪した。

咳払いをし、

「早速、本題に入る。

以前からジルや皆が心配している世継ぎだが、そなた達の子を貰えないだろうか？」

「私は喜んで差し上げますわ。私と陛下の結びつきが益々強くなり  
ますわよね。」

アマリリスが、嬉々として言った。

。

「クラウド公、アルバース公、ステリア公 アマリリスはこう言っているが、別に強制ではない。

意見を聴こう。」

思案顔でクラウス公が発言した。

「それは我々だけの一存では申せません。

本人に聞いてみなければお答えしかねますが。」

クラウス公の意見にアルバース公、ステリア公も賛同した。

「それは最もだ。

本人に国を受け継ぐと言う強い意志がないと、民が哀れだ。」

ジルに目配せし、皆の前に紙を置いた。

「一通りの条件は書いておいた。それを基に検討をしてくれ。」

一ヶ月後此処に何人集まるかな？

と、意地の悪い笑顔を浮かべ皆を見送った。

## 国王の条件

四公に渡された書面の、一部抜粋。

- 、国を愛すること
- 、民を虐げない
- 一、公爵家の後継ぎではない者
- 、男女問わない

……

……

……

執務室を出た後、控えの間に来ていた。

「何だこんな簡単でいいのか？」  
条件を読んだ後、拍子抜けした。

「ハルビル簡単が一番難しいのですよ。」  
ため息を吐きながらアルバース公に注意した。

単純だからこそ、おろそかにするが出来ない。おろそかにすれば民は離れていき、国などなくなってしまう。

「うっ、分かっているよ……、多分。」  
深く考えずに言った事に、反省した。

「そうね……。陛下の中に常にあるのでしょうかね。」  
国などに縛られて、可哀想な人……。」「  
最後の言葉は、憐れむものではないが、彼女の本心だったのかも知れない。

「……………」

「ところでジークは、何処行ったんだ？」

「そっね。」

来る時は一緒に居たはずなのに、いつの間に……」

「さあ、愛しい人にも会いに行っただんじゃないですか？」

## その6

天気は快晴。

まるで未来ある若者達を応援している様な天気だと、ティアナは思った。

謁見の間に正装し玉座に座る彼女の前には、決意を決めた者達が居た。

北のハルビル・アルバース公の三男 ビルズ・アルバース(14)  
焦げ茶色の少し長めの髪で、母親似な彼はそわそわと落ち着きがない。

東のアマリリス・グルーヴィー公の長女 マリア・グルーヴィー(15)  
母親譲りの栗色の髪で可愛い顔をして、堂々としている。

西のジーク・ステリア公の長男 カイル・ステリア(16)  
金髪で甘い顔立ち、父親似ている。

同じく長女 リリア・ステリア(16)  
茶髪で兄と同じ顔している。双子だ。

南のブラウン・クラウドス公は、適任者がいないと断りがあったのを了承した。

全員が揃ったのを確認し、陛下が挨拶を始めた。

「まず、皆の気持ちに感謝の言葉を贈ろう。

ありがとう。」

深々と頭を下げた。驚いた。

国王が下の者に頭を下げるなど聞いた事がない。

少しの動揺を感じとったティアナは

「この礼は国王としてではない。」

ティアナ・ラグナロス個人が感謝を述べるのだ。」

世継ぎが原因で、要らぬ苦勞を掛ける若者達にせめてものお詫びの気持ちを含めて…。

「事前に報せた通りこれから城で、勉強に励んでもらいたい。

早速、明日から始めるに当たって何か質問があるか？」

勢いよく手を挙げたのは、マリア・ブルーヴィーだ。質問したくてさつきからウズウズしていた。

「お聞きしたいのですが、何故ステリア公だけお二人なのですか？」

マリアの質問は謁見の間に居る誰しもが思ったことだ。

条件には一人だと決められていたはずなのに。

「私もお聞きしたいのですが。」

ステリア公にお子様がお二人のはず、どちらかが公爵家の跡継ぎですよね？」

宰相ジルも、困惑気味に聞いてきた。

「一人だと言ったんだかな…。」

ステリア公もどちらに後を継いでもらうか悩んでいると言っていた。

両方優秀であるが為に決めかねていたらしい。

そこに今回の話が舞い込んできたので、これ幸いにと二人を送り込んできた。

もし双子のどちらかが選ばれた場合、選ばれなかった方が領地に帰り後を継ぐ事になっているそうだ。

あまりに粘るので、全領民の了承が得られたのなら特例として認めると言った。

「それで、これが結果だ。

あいつの顔に領民は、騙されている。」

ティアナは不貞腐れてしまった。

不可能を可能にする男の子だ世継ぎにはびったりなのかも知れない。  
と周囲の者達は密かに思った。

「君達の未来が、この国を善き方向へと導いてくれる事を願う。」



## ビルの決意

ビルズ・アルバースは、ハルビル・アルバース公爵第6子としての世に生を受けた。

女3人、男2人子沢山なアルバース公ではあつたがビルを可愛がっていた。

母、兄や姉達も年の離れた弟を可愛がった。

未っ子で可愛がられてはいたが、我が儘にはなれなかった。

忙しい家族を気遣い、家で大人しくしていた。

その性が、人見知りか、激しく家からあまり出なくなっていた。

しかし、いつまでもこんな性格ではダメだと感じていたが自分では、どうにもきっかけが掴めなかった。

そんな時に今回の話が舞い込んできた。

「ビルズ。

あのさ、陛下に頼まれたんだけど、お前さえ良ければ、俺はビルズを推したいと思ってるんだかどうか？」

父が僕をおしてくれるだなんて、驚いた。

まだまだ、小さい子供扱いだと思っていたのに、嬉しかった。

「父上、僕でいいのですか？」

「ああ。

お前はまだ小さいが将来は大物になりそいだからな。」

笑顔で頭を乱暴に撫でられた。

「ゆっくり考えるといい。但し、自分の可能性を諦めるなよ。」

父の最後の言葉が突き刺った。

その後の事はあまり覚えてない。気付いたら自分の部屋にいた。

父には自分の悩みなど筒抜けなんだなと、窓から覗く月を眺めた。

いつまでもそうして居たかったが、来客を知らせるノックが響いた。

入って来たのは、母だった。

「ビルズ、あなたご飯も食べないなんて心配するじゃない。」  
ぷりぷり怒りながら、夜食を持ってきてくれた。

「母上、すみません。食欲がなくて…」

「旦那様が言った事気にしてるのね。」

「……。」

「貴方が産まれたのが遅かったじゃない？」

旦那様は上の子達が産まれた時、お城で仕事していたから一緒にはいられなかったの。だから、子育ては私任せでね。

貴方が出来たって分かった時、自分が育てるんだってはりきってたのよ。」

可笑しそうに、笑いながら語ってくれた。

初めて聞く自分が産まれる前の話。

「こつちに戻っても忙しさは変わらなかったけど、少しでも時間が出来ると、貴方の顔を見に来たの。」

私とどっちが好きなのって、喧嘩した事もあったのよ。」

何だか容易に想像出来てしまう夫婦喧嘩だ。

最後はお前が一番だよって言ってくれたのよって恥ずかしそうに告白した。

「あなたは私達の自慢の息子なのだから、自信を持ちなさい。」  
言うだけ言って母は部屋から出ていった。

心配させてしまった。

母は元気のない僕を氣遣って励ましてくれた。

小さい僕の世界を広げる為に父なりに、考えてくれていた。後は自分が決めるだけ、心が少し軽くなった。

お腹すいた。

その日の母のご飯がいつもより美味しく感じた。

「いつてきます。」

「いつでも帰ってらっしゃい。」

待ってるから

優しい母の言葉に見送られて旅立った。

## マリアの憂鬱

「はあ。もうダメ。

どうしてあれが赦されているのかわからないわあー！！」  
マリア・グルーヴィーは叫んだ。

「まあまあ、お姉さま落ち着いて下さいな。」

一つ下の妹アリア・グルーヴィーは、姉の苛立ちの原因が分からなく優しく声をかけた。

「アリア、私は我慢の限界なの！！」

バンバンと机を叩いて憤っていた。

「あなたはいいの？」

「いつも言ってるではありませんか。人それぞれなのですから、私達が何を言っても変える事は出来ないと。」

姉のマリアは、気性が激しい、妹のアリアはおっとりとしている。姉妹は正反対の性格をしていたが、仲がよかった。

「それに陛下が赦されているのですから。」

それがそもそもの原因だ。

何故、容認されている。国家規模の陰謀、それとも、もっと別の何かなの。

一人悶々と、考えを廻らせていると

「そうそう。」

それに、母さんが折れる訳ないよ。」

今まで傍観していた一つ上の兄アギト・グルーヴィーが話に入ってきた。

「母さんなんて呼ぶんじゃない！！」

マリアは母アマリス・グルーヴィー公爵のことで怒っていたのだ。と言ってもマリアが一方的に怒っているだけであって、アマリスは気にもとめていない。

兄のアギトが何気なく言った。

「それならいつそ王様にでもなつたら？」

「そんなの無理に決まってるでしょ。」

と、その場は笑い話で終わった。

後に、この話は現実に近いものとなるのは今はまだ誰も知らない。

## カイルの焦燥

俺には双子の妹が居る。

多分、仲は悪くない。

しかし、今は少し距離をおいている。

喧嘩した訳じゃない。

ただ、俺たちの間に問題が生じた。

15歳の誕生日に、いきなり親父は妹と俺のどちらかに家を譲ると言い出した。

公爵家は、代々男子優勢で継承され、一部例外は除き、みなそれに倣ってきた。

順当にいったら次のステリア公爵は俺のはずなのに。

「優秀な方に継いで貰いたいしさ。」

それに地位に、甘えて欲しくないんだよね。」

軽い口調で言っではいるが、親父の言葉は重みがあった。

確かに昨日までは俺が家を継ぎ、妹は何処かへ嫁いで行く。それが普通だと思っていた。

「カイル兄さんに何か不満でもあるんですか？」妹の声に我に還った。

「別にないよ。」

「なら、どうして？こんなことに意味はありません。」

妹ははつきりと拒絶した。

「じゃあ、家から出ていきなさい。」

カイルも不満なら出ていっつていいよ。」

親父は、本気だ。

俺達は所詮子供だ。

公爵家と言っ価値が在るから大事にされているだけで、庶民の子達

と変わりはない。

”了承”の答えしかないのだ。

16歳の誕生日にまた親父の言葉に驚かされた。聞き間違いに決まっている。そんなことはあり得ない。

「だから、二人にお城へ行って陛下の世継ぎになって欲しいんだよね。」

「……。」  
妹と顔見合わせて驚いた。

「許可は貰ったから、遠慮なく行っておいで。」  
上機嫌で語ってくれた。

ステリア公爵はどうするのか聞くと、陛下が選んだ後に決めるそう  
だ。

馬鹿らしくなった、今まで親父に認められる後継者になろうとしていたのに、無駄だったんだと悟った。

「俺は行かない。」

もう親父に振り回されるのは、ごめんだ。  
自分から出て行ってやる。」

扉に手を掛けて、出ていこうとすると親父の声に振り返った。

「お前達、母親に会いたくないか？」  
「……！」

親父から、母親の話が出るなんて意外だった。  
母親の事を聞いても一切教えてはなかった。

ただ、そばに居なくても愛されると言っただけだった。

「世継ぎの話と母親が関係があるんですか？」

「勿論。」

関係なかったら言わないよ。  
どうするカイル、リリア？」

親父の方が一枚も上手だった。敗けを認めるしかなさそうだ。  
”了承”の返事をした。

「お城に居るよ。

後は自分達で探しなさい。」

出発の日親父から俺は万年筆、妹はネックレスを貰った。

母親から初めての誕生日プレゼント。



## リリアの困惑

私には双子の兄が居る。

仲は良い方。

今は、ギクシャクしてはいるけど嫌いじゃない。

そもそも父様の突拍子もない発言が原因だから、ため息が出る。

15歳の誕生日に、いきなり父様は兄と私どちらかに家を譲ると言い出した。

公爵家は、代々男子優勢で継承され、一部例外は除き、みなそれに倣ってきた。

順当にいったら次のステリア公爵になるのはカイル兄さん。

「優秀な方に継いで貰いたいしさ。」

それに地位に、甘えて欲しくないんだよね。」

いつもの調子で言っではいるが、父様の言葉は怖かった。

兄が家を継ぎ、私は何処か良い縁談に恵まれて嫁にでも行くものだと思っていた。

公爵家を継ぐだなんて考えもしなかった。父様の意図が解らなかった。

「カイル兄さんに何か不満でもあるんですか？」

不満げに聞いてみた。

「別にないよ。」

「なら、どうして？こんなことに意味はありません。」

冗談じゃない。遣りたくもないことをしたくない。

「じゃあ、家から出ていきなさい。」

カイルも不満なら出ていっていいよ。」

父様は、本気だった。

私達は子供だ。

家を出ては生活出来ない。

こつ言われて仕舞えば選択の仕様がなかった。

”了承”の答えしかな出なかった。

明日からの苦勞を思えば、誕生日を素直に喜べなかった。

16歳の誕生日にまたもや、驚かされた。

世の中あり得ないことばかりだ。

「だから、二人にお城へ行って陛下の世継ぎになって欲しいんだよね。」

「……。」

兄と顔見合わせて驚いた。

「許可は貰ったから、遠慮なく行っておいで。」

父様は上機嫌で語ってくれた。

兄がステリア公爵はどうするのか聞くと、陛下が選んだ後に決めるとのこと。

何だか可笑しくなった。

笑えなかったけど、酷く可笑しかった。

「俺は行かない。」

もう親父に振り回されるのは、ごめんだ。

自分から出て行ってやる。」

扉に手を掛けて、出ていこうとする兄に続けて足を踏み出す。

「お前達、母親に会いたくないか？」

「!!!!!!」

父様から、母様の話が出るなんて…。  
ステリア公爵家では触れてはいけない話の一つだったのに、自分から話を切り出すって、このタイミングに意味はあるの？

「世継ぎの話と母親が関係があるんですか？」

「勿論。」

関係なかったら言わないよ。

どうするカイル、リリア？」

今、聞かなかったら母様の話は永遠に聞けない様な気がした。  
会って話したい。

”了承”の返事をした。

去年の誕生日より明るい気持ちになった。

「お城に居るよ。」

後は自分達で探しなさい。」

ただそれだけ、でも一歩前進した。

出発の日父様から兄は万年筆、私はネックレスを戴いた。

母様から初めての誕生日プレゼント。

## その7

世継ぎ候補達と面通りを終え執務室に戻った国王ティアナはソファに座り疲れた顔をした。

黙って後ろを着いて来ていた宰相ジルは、紅茶を入れた。いい香りに顔を上げたティアナは礼を言い、口に運んだ。

「どうだ、ジルのお眼鏡にかなった奴はいたか？」  
面白そうに聞いてきた。

少し思案して

「そうですね。」

「マリア・グルーヴィー様とかいいと思います。」

「そうか。」

「ご不満ですか。」

言葉に棘が感じられる物言いだった。

「マリアには、望みがあるようだ。しかし、小さい。」

国を望むようならもっと大きく、もっと貧欲にならないといけない。

「

マリア・グルーヴィーの望みが国家規模だったら、どうするんだと心の中で突っ込んだ。

その頃小さい野望を燃やしているマリア・グルーヴィーは、クシヤミをしていた。

「陛下はどなたが有望だと思われたのですか？」

「今の時点では、いない。」

それぞれ気づかなければ、王になどなれはしない。これからに懸かっているな。

鍛えてやれ。」

深々と頭を下げ了解の意を示した。

## その8

世継ぎ教育が始まった。

「皆様、野宿はお得意ですか？」

宰相ジルが語った試練とも言つ教育に驚いた。

「城の後ろにある山に行つて二週間生活してもらいます。

勿論、死なれては困りますので最低限のものは保証しますし、好きなものを持参してもらつて構いません。

単独でも、皆様でご協力してでも構いません。

二週間山で過ごして頂けたら終わりです。

途中で棄権なさつても問題ありません。

棄権の場合は、荷物の中に花火が入つてますので、それでお知らせ下さい。

お迎えに上がります。」

一通り説明し終え質問はありませんかと問うた。

マリア・グルーヴィーが一番に応えた。

「それは、陛下のお考えなのですか？」

「勿論です。」

言いきつた。

カイル・ステリアは

「皆で協力したから、または棄権したからと言って評価が下がる」とはありますか？」

「それはないです。」

「絶対に？」

「絶対です。」

――

各自納得するまで、続けられた。

「それでは、明朝出発ですので準備をしてお待ち下さい。」

## その9

朝早くに、4人は静かに発った。

その後ろ姿をティアナはテラスから眺めていた。

「お見送りに行かなくてよろしいのですか？」

「何のために、こんな朝早くに発たせたと思うのだ。」

「そうですね…。」

無事に戻られるでしょうか。」

「『影』をつけてある。」

問題はなかるう。」

『影』とは国王直属の親衛隊。

その名の通り影から陛下を守る。

暗殺など、表では出来ない仕事を請け負う、精鋭部隊だ。

「『影』ですか…。」

「さて、早速取りかかろう。」

あの子達の為に、過ごしやすくしてやらねば。

要らないものを、片付けよう。」

優しい顔を外して、国王としての残酷な一面を覗かせた。

ジルは、いつもながら見事な変わり様だと感心した。



その日、大規模な肅正が行われた。

世継ぎ候補者達が、王都に入る時に乗じてよくない輩も一緒に入つて来ていた。

王城にも間者が紛れ込んでいた。

それらを煽動した者達を裁いたのだ。

4人を城から出したのは、巻き込まれない為だ。

「しかし、二週間は長いですよ」

「いいじゃないか、私は1ヶ月も山にいたぞ。」

八つ当たり気味に反論した。

## その10

二週間後、誰も途中で抜けることなく野宿は無事に終わった。度々危ない目に遭ったそうだが、皆で解決し仲を深めた。いい顔つきになって帰って来たのをティアナは密かに悦んだ。労いの言葉をかけ、ゆっくり休むことを勧めた。帰ってきた城内の雰囲気が変わっているのに、気付く者はいなかった。

執務室にて『影』から報告を聞いた。

「皆様、大変有望でした。

特にカイル様がリーダーシップを取り皆様を導いて下さって、危険を回避致しまして……」

「いつもの様に喋ってくれ。気持ち悪い。

鳥肌がたった。」

ティアナは見ると腕を差し出した。

「いつもより丁寧に話してんのが気に食わねえってなんだ!!」

「そつちのが落ち着く。」

精鋭部隊『影』の隊長クロウは、乱暴に言い放った。

若干18歳にして隊長となった彼は、優秀な人材ではあったがティアナのからかい相手だ。

「何処まで言ったけか。」

がしがし頭を搔いて、そつぽを向いた。

「簡潔にきこう。」

「気に入った奴はいいたか?」

「……………」  
「答えられないのか？」

即断即決な鬼の隊長クロウが、普段表情など読ませない奴が何故か落ち着きがない。

「そんなことはない…。」

見込みはあるぞ。」

「ふうん。」

好きな奴出来たか。大人になつたなクロウ。」

「なつな、に言つてやがる!!！」

動揺して、かなりの汗をかいている。

明らかに凶星だと言っている。

「冗談だつたんだかな。」

呆れた声で言つた。

「で、どつちだ。」

「マリア嬢か…、リリア嬢」

後者の方で肩が揺れた。

「……………」

「まあ、頑張れ。」

クロウは自分で一杯一杯だったので、ティアナがどんな顔で言ったのか見なかった。

しどろもどろの報告をして、戻って行つた。

## その11

最初の教育に不安はあったものの、順調に進んでいった。

宰相ジルの講義は厳しかった。

鍛練場での訓練では、マリアとリリアがやらないと一悶着あったが粘り強く説得した。

その他にも、本当に必要なのか？と言うものまで様々あった。

「こう毎日あると、疲れますわね。」

「でも、僕楽しいです。」

休憩中に、交わされる何気ない会話。

「充実した日々だ。」

「皆さんは、国王になったら何をしたいですか？」

マリアが聞いてきた。

「望みがなければ、国の主になろうとは思いませんもの。」

「まずは、お前が答える。」カイルが低い声で応えた。

大それた話ではないのだけれども、と話始めた。

「グルーヴィー公爵当主の事を陛下にお聞きしたかったから。」

「ご当主にご不満がありますの？」

「悪い評判は聞いてないが。」

「政務には、問題はないのです。」

ただ、あの姿が…」

と言われて皆、アマリス・グルーヴィー公爵の顔を思い浮かべた。別に変わった所はないはず、と想い至った。

「あの人は『四公』唯一の女性何て言われていますが、」

確かに公爵家の女性当主は珍しい。歴史の中でも1、2人いるかないかだ。

マリアの次の言葉を聞くまでは。

「ただの女装好きの男なのです。」

その場に静寂が訪れた。

## その12

「直接聞いてもらっても構わないぞ。」

いつの間にか、国王ティアナが傍に立っていた。

「マリアは、そんな事聞きたかったのか？」

「はい。」

勢いよく起立し、礼をした。

皆も聞きたそうにしているので、ティアナは空いている席に座り給仕が入れた紅茶を楽しんだ。

「マリアは何故、アマリリスが女装しているか理由は知っているか？」

「いいえ。存じません。」

そう言えば、聞いたことがなかった。

それならばと、昔話をティアナは始めた。

私が最初に会ったときはまだ、アマリリスは男の姿をしていた。

10歳前後だったかな、奴に転機がきたのは。

私が何時ものように、遊んでいた時だった。遠くで入りたそうだったから、近くに呼んで仲間に入れてやった。

「その遊びとはなんでしようか？」

待ちきれずマリアが聞いた。

「女装だ。」

陛下の危なげな趣味を知ってしまったのではないかと皆思った。

嫌がる、男どもに無理矢理着せるのが、それは楽しくてな。

侍女が言い出したんだが、やってみるとこれが中々。

奴も、犠牲者の一人になるはずだったんだか…。

あいつは、自分の姿を鏡で見た瞬間叫んだ。

「美しいっ!!！」

って、自画自賛を始めた。

この世の中に自分より美しい人は、存在しない。などなど、尽きることはなかった。

流石に侍女と二人で、これはマズイと思った、が後の祭り。

### その13

公爵には悪いことをしたので、せめてもの償いに結婚相手を探してやった。

別に男であることが嫌ではなかったから。

ただ、妻の条件が自分より美しい人だったのはキツかったなと国王ティアナは笑いながら言った。

「僕、女性公爵って凄いと思ってましたけど、。」

ビルズは困惑気味だ。

「しかし、全然気づかなかったな。」

カイルは、女装でも仕事さえまっとうしてくれていれば、とどちらでも構わないと思った。

「結構、有名な話だな。」

古参の者は皆知っているが、若い者は知らないのか…。」

「確かにお母様は、お綺麗ですが、。」

マリアは、力が抜けた。

国王が容認にしている理由が理由だけに、自分が考えてる女装廃止に支障をきたしかねない。

苦労が水の沫になってしまふ。

「すまないな。」

アマリリスには、辛いかも知れんが、どうすることも出来ないのだ。

だが、私が国王だから赦されている事を忘れるな。」

ティアナは口にはしなかったが、次の王になれば女装廃止が現実味



を帯びてくる事を示唆した。

「有り難うございます。」

今のお話を聞けただけで、満足です。」

## その14

ところで、と今まで聞き役に徹していたリリアが言った。

「ティアナ様は、どうしてこちらに？」

何かご用がございましたか？」

ティアナは思い出したとばかりに、侍女に指示をだした。

「皆頑張っているようなので、労いと褒美を持って来たのだ。」

侍女達の手でテーブルの上には、色鮮やかなお菓子や異国の珍しい菓子が並べられた。

「疲れているだろう？そう言うときは、甘いものが一番だ。」

マリア、リリア、ビルズは目を輝かせていたが、カイルは嬉しそうではなかった。

「……………」

カイルは甘いものが得意ではなかった。

それが分かっているのか侍女が、自分の前に箱をおいた。

「それは、美味しいぞカイル。お前の父親も喜んで食べている。」

目の前に出されたのは、緑色の物体だった。

親父も甘いものが苦手なはずなのに、喜ぶとは。

そっと手で摘まんで口に入れた。

なんとも言えない味が、口の中に広がった。

「気に入った様だな。」

「はい。」

次々と口の中に消えていった。

「戴いてよろしいですか？」

兄が嬉しそうに食べているのでリリアも食べたくなった。

「ああ。」

皆、口にした途端なんとも言えない顔をして、紅茶を飲んだ。口には合わなかったようだ。

「異国の菓子で、抹茶」と言うお茶の一種だ。

砂糖や蜂蜜を一切使っていないから苦い。

私もあまり好きではない。」

砂糖がたっぷり使われている、菓子を口に入れた。

カイルはこの時少し違和感を感じていたが。

美味しく戴いているところに水を差すような真似は、やめて今は菓子を楽しむことに専念した。

## その15

国王ティアナは唐突に表れて言い放った。

「今日は、授業参観をする。」

優雅に椅子に、腰かけた。

「陛下。」

今、大事な所なので邪魔しないで戴けますか？」

宰相ジルは授業中に飛び込んできたティアナを、追い出しに掛かった。

「邪魔はせん。」

気にせず続けよ。」

「貴方が気にしなくとも、四人がしています。」

四人は、どうしたものかと二人のやり取りを見守っている。

「貴方に見られなくても、順調に進んでいます。」

陛下には、執務の方を頑張って戴きたいのです。」

「急ぎのものはないから大丈夫だ。」

少しの押し問答が繰り広げられたが、ジルがティアナに勝てるはずもなく、大人しくして置いて下さいと何度も念を推し、再開させた。今日の授業は、歴代の国王についてだった。

「三代目国王は、税を重くし、重労働を課し、少しでも足らなかつたり休んだ者達を斬首にしていったのです。」

国王は贅沢をするために民から暴利を貪ったのです。

何度も家臣達は諫めたにも関わらず、改まることはなく、臣下達の手によって弑されました。」

次々と歴代の王達の話をしているのを、ティアナは後ろで目を閉じて、静かに聞き入っていた。

「続いて、先代国王についてですが、よく知っておいでのお方がい

らっしゃいますので、特別に講師を頼みたいと思います。  
ティアナ様どうぞ前へ。」  
閉じていた目をゆっくり開けて、立ち上がった。

## その16

してやられた。

日頃の恨みを晴らせて気分の良い良さげな、ジルに苛立ちを感じたが、仕方がないなど、何から話そうかと考えた。

先代の王、父について私は知らないのだ。  
民の方がよく知っているくらいだ。

父には子供が私しかいなかった。

いくら父が母を寵愛していようが、身分の低い母が后になどなれなかったし、母も望んではいなかった。

それが気に入らない者達が出て、危害を加えられる事を危惧してか父には年に数回しか逢えなかった。

母が亡くなってから、生活が一変した。

日替りで講師が付き、勉強漬けになった。

何故かと問えば、国の為に勉強しなさいと言われた。

毎日必死で勉強に励んで、周りの事を把握する余裕がなかった。

父が亡くなり、国を受け継いだ時、王を偲ぶ民の声が多く聴こえた。  
父は王だったんだなと改めて感じた。

会うときはいつも父親の顔で、王の顔を見せてくれたことはなかった。

どんな王であったか知らないと、初めて気づいた。

傍に居たのに、何でこんなにも解らない？

何で？なんで？

そんな疑問も忙しさを理由に忘れていった。

「……………、……………か、陛下!!!」  
はっと眼を開けば、訝しげにこちらを伺う宰相ジルの顔が目に入った。

「どうかなさいました?」

「すまない。ちょっと…」

大丈夫だと安心させようと、動いたら目眩がした。  
手を机につき、不様に倒れるのは防いだ。

「陛下!?!」

「ティアナ様!!!」

座り込み、大袈裟に手を降った。

「大丈夫だ。」

ただの立ち眩みだ。」

「医師を呼んで参りますわ!!!」

リリアが席を立ち足早に出ていこうとするのを、国王ティアナは止めた。

「大事ない。」

「しかし、ティアナ様に何かありましたら…」

宰相ジルを手招きし、耳元で何事か話すとジルの顔が強張った。  
数刻考えると頷いた。

「分かりました。」

お部屋まで、お送り致します。

皆様申し訳ありませんが、今日の授業はこれまでです。  
明日続きを行います。」

ジルは、淡々と言うとティアナに手を貸しゆっくり部屋から出ていこうとした。

「お待ち下さい。」

本当に大丈夫なのですか？」

カイルが、心配そうな声で聞いてきた。

「ああ…、ただの立ち眩みだ。」

部屋を出る前に、ジルが思い出した様に念を推していった。

「この事は他言無用です。」

よろしいですね。」

皆が頷いたのを確かめて部屋を後にした。



部屋に残された四人は、それぞれ心配していた。

「テイ、テイアナ様、本当に大丈夫だったのでしょうか？」  
部屋の中を意味なく歩き回っている。

「ビルズ、心配なのは分かるが落ち着け。」  
酷く落ち着きがないビルズに、カイルが優しく声をかける。

「私達がいくらか心配などしても、ご本人に大事ないと言われてしまつてはどうしようもありませんわね。」

アマリリスは頬に手をあて、ため息をつく。

「そうですね。」

顔色が悪い様に見えたので、貧血かも知れませんわ。

私も時々なりますもの。」

リリアは、所謂女の事情ではないかと暗に可能性を示してみた。

「まあ。」

と、女子二人は色々と盛り上がった。

話についていけなかった男子二人だが、聞こえてくる内容に何となく察した。

居たたまれなくてカイルは、ビルズに目で合図し、そっと部屋を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6663z/>

---

世継ぎ問題（仮）

2012年1月10日21時47分発行